

20. 住居の改築・清掃によって自宅生活が可能になった夏型過敏性肺臓炎の1例: 住宅清掃・改築について

篠崎 理, 河野正和, 弥富真理
(千大)

症例は61歳女性。2002年9月より咳嗽、喀痰、労作時呼吸困難出現し10月に間質性肺炎の診断で当科入院となりステロイドパルス療法で軽快したが2003年7月に再度呼吸困難出現。胸部CT上全体に小葉中心性にスリガラス状陰影、中間隔壁の肥厚、気管支血管膜の肥厚を認めた。帰宅誘発試験を行ったところCRP上昇、pO₂低下、捻髪音出現し、陽性と判断した。また、トリコスポロン抗体256倍であり、夏型過敏性肺臓炎と診断した。一般にこのような場合転居するのが望ましいが実際にはそうできず、清掃と改築にとどまる場合も多い。本症例は清掃・改築によって現在症状軽快し、自宅生活を送っている。清掃については熊本大学の菅らが一定の基準を提唱している一方、改築については現在確たる基準は示されていない。今回、夏型過敏性肺臓炎の症例に対する清掃・改築に対し考察を加えたので報告する。

21. 両側上葉胸膜下病変を呈し開胸生検にて診断した multicentric castleman disease の1例

安藤総一郎, 木村秀樹, 山本直敬
鈴木 実, 飯田智彦
(千葉県がんセンター)
酒井 力 (同・腫瘍血液内科)
武内利直 (同・病理科)

症例は51歳男性。平成15年5月腸閉塞で入院した千葉県循環器病センターにて胸部異常影を指摘され、この頃より38.0台の熱発も出現。退院後、胸部精査目的にて当センター紹介受診。胸部CT上、両側上葉胸膜下優位に多発する結節影を認め、気管支鏡検査、CTガイド下経皮的腫瘍生検にて確定診断がつかず、8月4日開胸生検を施行し、胸膜下の結節病変および縦隔リンパ節#3aを採取した。病理結果はidiopathic plasmacytic lymphadenopathy。血中IL6値も159pg/mlと高値を示し、multicentric castleman diseaseの最終診断となった。

22. 肺野の嚢胞を伴うスリガラス影 (GGO) と中気道の隆起病変を認め、シェーグレン症候群に合併した肺リンパ球増殖性疾患の1例

北園 聡, 岡田 理, 黒須克志
(千大)
廣島健三 (同・基礎病理学)

症例は32歳女性。主訴は呼吸困難。CT上肺野に多発する嚢胞陰影とGGOを認めた。抗SS-A, SS-B抗体の上昇、lip biopsyでリンパ球浸潤を認め、シェーグレン症候群と診断された。右S4のGGOより胸腔鏡下肺生検を施行、得られた検体では多数のリンパ球浸潤を認めたが、遺伝子検査でモノクローナリティは認めなかった。経過中肺野陰影の増大と症状の増悪を認め、ステロイド治療を開始。嚢胞陰影に変化はなかったが、肺野GGOと声門下隆起病変は改善した。肺野の嚢胞陰影を伴うGGOと気道内隆起病変を認めた肺リンパ球増殖性疾患の1例を報告する。

23. 肺原発MALTリンパ腫の1例

外山真一, 新井康弘 (幸手総合)
門山周文 (さいたま赤十字)

症例は58歳女性。近医にて胸部異常陰影を指摘され、2002年12月当院紹介受診。右肺門部異常影について気管支鏡検査による精査の結果MALTリンパ腫を疑われ、また病変が肺に限局していたため、2003年2月手術目的にてさいたま赤十字病院呼吸器外科紹介入院となった。右中下葉切除およびリンパ節郭清術施行され、術後病理所見よりMALTリンパ腫と確定した。また、気管支周囲脂肪組織と中下葉間リンパ節への浸潤を認めたため、手術後4月より当院にて全身化学療法(CHOP)を開始した。6クールにて終了、その後現在にかけて増悪も認めず外来通院継続中である。

24. 肺原発MALT lymphomaの1例

露崎淳一, 森 典子, 斎藤正佳
(国保成東)
熊谷匡也 (千葉県がんセンター)
伊丹真紀子, 武内利直
(同・臨床病理部)
黄 英哲, 藤野道夫, 山川久美
(国療千葉東)

症例は55歳女性。住民検診にて胸部異常影を指摘され来院。胸部レントゲン、CTにて多発浸潤影を認め、BOOPを疑いステロイド治療を行った。しかしながら陰影の改善を認めず、胸腔鏡下肺生検を施行したところextranodal marginal zone B-cell lymphomaの診断を得